

今月のみことば 2017年9月

「祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。」（伝道者の書 7章2節）

人生の転機



7月18日、聖路加国際病院の日野原重明氏が105歳で逝去、というニュースは、瞬間に日本を駆け巡った。2020年の東京オリンピックの年までスケジュールが埋まっていて、まだまだご活躍されるだろう、とだれもが思っていたが、ついに天に帰られた。

生涯の終わりに至るまで現役の医師であったという事自体、奇跡であるが、日野原氏の生き方を変える大きな出来事があったことはあまり知られていない。それは、昭和45年(1970年)3月31日に起きたよど号ハイジャック事件である。

学会に参加するため日野原氏が乗っていた福岡行き日本航空351便(よど号)は、飛行中に、赤軍派を名乗る9名の学生に乗っ取られ、北朝鮮の首都・平壤へ目的地の変更を迫られた。結局、犯人の要求通りに、飛行機は平壤に着陸し、9名は北朝鮮に亡命を果たした。そして、実に122時間ぶりに乗客を乗せたよど号が羽田空港にもどった。日本の航空史上初のハイジャック事件は何とか収束した。

ところが、日野原氏が自宅に戻ってみると、広い部屋を埋め尽くすほどの花、花、花が待ち構えているではないか。

「いや、帰ってきたらびっくりしたですよ。『あ、これはお葬式だな』と思ったんだよ。…(お花の)ひとつずつに、人の名前が書いてあるでしょう?この気持ちを、皆さんにどうお返しをすればいいか、というように思った瞬間に、もう……うん。」

これ以降、「自分の人生を他人のために使いたいという決意を強められた」と病院関係者は言う。

機内に閉じ込められている時にも、不思議な出来事があった。ハイジャック犯が持っていた書籍を読みたい者がいるか、という問いに勇敢に手を挙げた日野原氏は、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を選んだ。五巻の大作であるが、勾留は一ヶ月ぐらいだろう、と覚悟し、この際、熟読してみようと決めた。

そして、開けてみたら、最初に書かれていた聖書のことばと今の状況が重なっているのに驚く。「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」(ヨハネによる福音書12章24節)。

「ひとりの人間は、まずは一つの麦だけど、このまま麦であるだけなのか、それとも死んだあとに実を結ぶように成長するか、そういうことがこのテーマだったなあ」と。

人はいつまでも生きるものではない。稀なる長寿者もやがて地上の生を終える時が来る。ところが私たちはあたかも永遠に地上に生きていられるかのように錯覚し、現代医学、サプリ、その他の「アンチエイジング」のマジックに、はかない望みを置く。しかし聖書は言う。「あなたの終わりを考えよ」と。死する者であることをはっきり自覚し、いつまでも残るもののために生き始めるというお手本を日野原氏は示してくれた。まさにこれこそ「生き方上手」そのものである。

